

異質なものの比較と均質なものの比較

計量社会学における比較の機能

立命館大学 筒井淳也

1 目的

本報告の目的は、計量分析を主な手法とする社会学（計量社会学）における方法論的特徴を捉えた上で、それがいかなる学的・理論的関心に基づいたものなのかを、他分野との比較を通じて明らかにすることである。

2 方法

計量手法についての社会学やその他の分野の動向（実際に論文で使用されているモデル、手法）やテキストブックの内容を概観した上で、近隣分野と比較した際の社会学の計量手法上の特徴を把握する。具体的には、新しい統計モデルが社会学分野で導入される（あるいは拒否される）事例をみる。そのうえで、上記の相違をもたらす学問上あるいは理論上の特性、あるいは理論への貢献のあり方について模索をする。

3 結果

これまでの社会学の計量分析の方向性の特徴は、「異質なものの比較」を通じて社会を記述的に理解する点にあった。これは、進学や経済学において、同質な個体どうしを比較することを通じて因果効果を追究するという方向性とはかなり異なったものである。因果推論モデルを社会学に導入する際に小さくない混乱が観察されたのは、このためである。パネルデータ分析における異質性のデータ（いわゆる人口学的変数）の扱い、マルチレベル分析における変数効果の位置づけにおいて、統計モデルのポテンシャルと分析目的に齟齬が生じることが多かったことがわかる。

4 結論

「同質なものを比較」することの方法論（因果推論モデル）については、統計学がその発展初期から志向していた方向性と一致するために、方法や含意についての知見の蓄積が多い。つまり、何のために何をするのか、という理解が明確にある。しかし数量データを異質な群の比較に用いるという方法については、そのあり方や妥当性についての検討がほとんどなされていないのが現状である。なおかつ、社会の記述的理解の際にデータを用いるというモノグラフ的志向においても、何らかの比較をするということは、どこかで同質性を担保するということでもある。「異質なものの比較」と「同質なものの比較」の関係については、いまだに検討する余地が多く残されている。

文献

筒井淳也, 2017, 「数字を使って何をするのか：計量社会学の行方」『現代思想』45: 162-177.

Gary Goertz and James Mahoney, 2012, *A Tale of Two Cultures: Qualitative and Quantitative Research in the Social Sciences*, Princeton University Press. (=西川賢・今井真士訳, 『社会科学のパラダイム論争：2つの文化の物語』勁草書房)